

## 当事者主体のアプローチ継続と、その相対化

医療法人聖和錦秀会阪本病院 なかまの家

中島 育子、磯邊 瑞穂、加藤 はるか、木野 真帆、小林 宣子、森田 五月、吉松 聖果  
玉置 朋子、村上 佳子

### 1.緒言

医療の分野において、統計学的なエビデンスを根拠とした正しい「健康」像を目指す動きが増しており、精神科医療においても「社会適応」や「正常化」が治療の目標となりやすくなってきている。こうした社会の動きと呼応するようにして当事者を主体としたさまざまな治療的アプローチが生まれてきている。これらはどうしても管理的になりがちな既存の医療の価値観を揺るがし、病者に主体性を取り戻す可能性に満ちている。

当院のデイケア「なかまの家」はこれら当事者主体の動きに早くから着目し、当事者研究や (WRAP)、(IPS)、オープンダイアログなどの活動を取り入れてきた。これらは既存の精神医学に対するアンチテーゼを含むものであるが、その側面を強調するとかえってしなやかさを失い発展性を欠いたものになりかねない。そのため、当事者主体の活動が意識すべきは反精神医学ではなく、絶対的なものを相対化する、いわばイロニー(皮肉)の視点だろう。本研究ではイロニーとユーモアについてのドゥルーズの思考<sup>1)</sup>を参照することで、当事者主体の活動の持つ治療的な機制を取り出し、その発展への視野を開くことを目的とする。

### 2.方法

当事者研究、WRAP (元気回復行動プラン)、IPS (積極的なピアサポート)、オープンダイアログといった当事者中心の活動を継続し、その内容を相対化という視点でもって考察する。

### 3.研究結果、4.考察 \*読みやすさのため結果と考察をともに記すこととする。

まず当デイケアでこの一年に行われた当事者主体の活動の概略をまとめることにする。

・当事者研究…一般の人々も参加可能なオープンなプログラムとして毎週4回行い、また月に一回病棟へ出向き行った。また9月に行われた関西当事者研究交流集会に参加し、メンバーが口頭発表を行った。

・WRAP (元気回復行動プラン) …デイケアにおいては月に一回のプログラムとして行い、メンバーの有資格者 (ファシリテーター) を中心として各病棟へ赴き毎月行った。

・IPS (積極的なピアサポート) …毎月一回 IPS のテキストを用いた勉強会を開き、メンバーが病棟へ傾聴ボランティアとして赴いてピア・サポート的な関わりを行った。また東京で行われた IPS の全国的集会である「きらりの集い」に 8 名のメンバーとともに参加し、「ピア・アロマ・ハンドマッサージ」「ピア・ハンドメイド」「当事者研究」の三つの出展をした。

・オープンダイアログ…担当スタッフが研修に参加することで準備をし、入院中の患者 4 人と外来の患者 2 人に対してそれぞれ 2, 3 回行った。

以上の多岐にわたる活動のなかから、ここでは当事者研究、オープンダイアログの詳細を述べることで考察を行うことにする。

#### ・当事者研究

A 氏は 50 代男性、神経症性うつ状態、パチンコ依存症。趣味はアニメや漫画であり、女性スタッフの絵をよく描いている。日々ウォーキングを楽しみ、10 キロマラソンを完走したこともある。A 氏が行った発表のテーマを時系列順に以下に記す。

- 1 (失恋して) どのタイミングで気持ちを切り替えたらいいですか
- 2 GW のお金をかけない楽しみ方
- 3 真の男とは…?
- 4 夜中に知り合いから電話がかかってくる
- 5 ネガティブ発言
- 6 お金について、入浴について \*パートナーのお風呂嫌いについて
- 7 パートナーのチェンジについて
- 8 一週間 14000 円生活はぜいたくか?
- 9 期間限定の経済苦 \*無意識にパチンコしてしまったことについて
- 10 東大阪愛があるのか
- 11 顔は心をうつす鏡である
- 12 タバコの効用 \*院内全面禁煙を受けて
- 13 両性類の自分をどう思いますか? \*女性の服装を着だしてからの戸惑い
- 14 人間力・どうやって人間をみかくのか方法が分からない
- 15 アニメの男性はなぜあんなにカッコイイのか?
- 16 今の自分を見てどう思いますか? \*男らしさを諦めて女性的になる自分に対して
- 17 ウォーキング・ギネス記録を目指して
- 18 人間とは? \*宗教活動を通して出てきた問い
- 19 1995 年の挫折から 2013 年に栄光、そしてこれから

20～23 行動範囲とお金の使い方は反比例するのか パート 1～4

24 お金の使い方～サイフ 1,2,3～ \*財布を 3 つに分けることについて

25、26 ウォーキング世界一位を目指して パート 1、2

これらの結果を見ると、A 氏が「正しきもの」という超自我の要請にさまざまな形で対抗している様子が見て取れる。以下内容を補足しつつ辿ってみよう。健康的な生き方に関しては 12 で喫煙のメリットについて語り、健全なお金の使い方については 6、8、9 である程度の贅沢やパチンコもいいのではないかと語った。これに対してフロアからは色々な意見が出たが、大半は A 氏の意見に共感的なものであった。これらは超自我の要請に対してイロニーでもって対抗するものとも言えるだろう。ドゥルーズによると、イロニーとは「法をより高次の原理に向けて乗り越え、それによって法に二次的な権力しか認めまいとする運動」とされる<sup>り</sup>。例えば禁煙の風潮に対してタバコのおかげで心が健康になるなど、通常の論理よりも大切な原理があることを示すことなどである。このように既存のルールを疑うイロニーは自分らしさを救うのに役立つものであるが、疑うだけになってしまうと何も展開せず硬直化に陥ってしまう恐れがある。例えば 18「人間とは？」という生真面目に本質を問うような状態がそれにあたるだろう。

ここでイロニーの硬直化を中断させるものとして位置づけられるものがユーモアである。ユーモアとは「法から帰結へと下降する運動」であり、「きまじめな適用によって法の不条理を示」すこととされる。すなわち、A 氏の宗教活動から生まれた「人間とは？」という問いに対して、「それは神様が決めたことだから考えたことがない」と返したフロアは実にユーモア的な対応をしたといえるだろう。また A 氏がアニメの主人公のような真の男とのギャップに苦しむとき、彼が用いた方略もイロニーというよりはユーモア的である。そこにあるのは、「あんなものよりももっと男として大切なものがある」とするイロニー的なものではなく、「真の男でなければ男ではない、ならば女になればいいじゃないか」というユーモア的発想である。

以上から、当事者研究はイロニーを促進することで超自我からの圧力をやわらげ、時にユーモアを用いて硬直化を乗り越える場として機能しているといえるだろう。

#### ・オープンダイアログ

精神科病院で働くスタッフにとって、オープンダイアログは技術的な側面よりもその考え方において新しく衝撃的なものとして感じられる。ここでは研修に参加した看護師の感想とともに一つの事例を辿りながら考察を加えることにする。

B 氏は 70 代女性、統合失調症で長期入院している患者さんである。セッションは B 氏、姉とその娘、主治医、研修を受けた看護師 2 名、担当精神保健福祉士 (PSW) の計 7 名で行った。まず「家に帰りたい」という B 氏本人の希望が語られ、それに対して姉は自分も

高齢で面倒がみられないから様々な面での心配があることを具体的にあげ、入院しておいでほしいという希望が語られた。それに対して B 氏は「母親(すでに死去)は生きていて、自分と一緒に住む」ことや、実際には無い心臓の疾患で余命が僅かであることなど妄想を交えながら返答していった。

以下参加した看護師の感想を記す。「日々病棟で長期入院患者さんを見ていると、失礼ながらそんなにしっかり考えることができないというイメージを持ってしまう。けれど今回そういった推測をせずに本人の思いをゆっくり聞いていくと、『この病院で十何年も無駄にした』と当たり前の人間の苦しみが語られて、胸に重く響いた。そこには、母親が生きているうちに退院できたのに、という思いもあるのではないか。対話を続けていくなかで、その瞬間にしか起こらない対話があり、それに気づけることがうれしい。」

ここには日々の入院治療において、本当の意味で患者さんを尊重した対話をするものの難しさが見て取れる。しかしオープンダイアログの導入によってモノローグ的な治療関係を相対化し、ダイアログ的なものにするによってハッとするような言葉や変化が現れることが示された。「それに気づけることがうれしい」というスタッフの率直な感想からわかるように、重要な言葉というものは人の心を打つ。そしてオープンダイアログはそのような言葉が出ることを可能にする場であると考えられる。

## 5.結語

本研究では具体例を挙げつつ当事者主体の活動の持つ効果について示してきた。そこには本論で挙げたイロニーやユーモアなど、既存の価値観を相対化させるためのさまざまな機制が動いていることが見て取れた。これは当事者主体の活動がなぜ治療的なのかという側面を取り出したものである。しかしそれと同じくらい重要なことは、そもそも当事者主体の活動は本人たちだけでなくスタッフもまた生き生きと楽しめるということだろう。これらの活動が今後どのような形に発展していくのか、今後の課題としたい。

## 6.文献

- 1) G.ドゥルーズ. 『ザッヘッル=マゾッホ紹介』. 堀訳. 東京; 河出文庫. 2018; p129・pp.134-5
- 2) 斎藤環. 『オープンダイアログとは何か』. 東京; 医学書院. 2015